

《履修上の留意事項》面接授業と遠隔授業の併用実施

《担当者名》教授／安彦 善裕 講師／佐藤 惇 助教／吉田 光希 助教／森川 哲郎
 講師／大村 一将
 非常勤講師／西村 学子 非常勤講師／清水 重善 非常勤講師／青木 一太 非常勤講師／神野 由貴 非常勤講師
 ／高橋 耕一 非常勤講師／宇津宮 雅史

【概 要】

口腔病理学実習の目的は病理総論及び口腔病理学の講義で学んだ病理学的概念を実際に顕微鏡観察し、視覚的に捉えることで、これら概念に対する理解を深めることにある。
 そのためには正常構造の復習は不可欠であり、併せて肉眼所見と病理組織所見の関連や臨床所見と病理組織所見との関連なども理解する。

【学習目標】

- ☆ 各疾患によって起こる細胞や組織の変化を正常組織と対比させながら理解する。
- ☆ 病変のみならず、それに対応する全体の反応についても注意深く観察する目を養い、予後などの臨床的知識も身につけ説明する。
- ☆ 炎症では急性炎と慢性炎の組織像の違い、腫瘍では良性と悪性の組織像の違いなど基本的概念を説明する。
- ☆ 最低限、国家試験に対応出来るだけの範囲の各疾患の病理組織像を判断する。

【学習内容】

回	テーマ	授業内容および学習課題	担当者
1	◎ 〈オリエンテーション〉 ◎ 〈退行性病変 ①〉	● 演習の目的、レポート作成法などについて理解する。 ● 重要項目の確認、レポート作成。 ● オリエンテーションで実習の目的を理解させ、実習に対する心構え、注意事項、準備すべきものを把握させる。 ● 代表的な染色法であるH-E染色について理解を深めるため、ヘマトキシリンとエオジンの各単染色と二重染色を比較する。	安彦 善裕 佐藤 惇 吉田 光希 森川 哲郎 大村 一将
2	◎ 〈退行性病変 ②〉 1) 変性 (1) アミロイド変性 a) 舌 b) 肝 (2) 脂肪変性 a) 肝 (3) 水腫変性 a) 腎 (4) 糖質代謝障害 a) 糖尿病性糸球体硬化症 2) 壊死 (1) 貧血性梗塞 a) 心筋梗塞	● 退行性病変は、生体の代謝異常によって起こる変化であり、これには変性、萎縮、壊死がある。この項では左記の項目について学び、その病態や病因についての理解を深める。 ○ 「新訂版歯学生のための一般病理組織アトラス」 P.1-P.16、P.17-P.24 (D-4-1)①～④)	安彦 善裕 佐藤 惇 吉田 光希 森川 哲郎 大村 一将 清水 重善
3	◎ 〈増殖性病変〉 1) 再生と肉芽組織 a) 粘膜の創傷治癒（舌切傷） b) 骨折の治癒 c) 抜歯創治癒	● 1) 創傷の治癒、2) 欠損部の補充肉芽組織、3) 異物の処理、4) 炎症の修復過程に出現する肉芽組織について、その組織学的所見を把握させる。 ● 口腔領域に関連深い骨折の治癒過程、抜歯創の治癒過程について理解させる。 ● 潰瘍、特に、粘膜の潰瘍とはいかなるものか理解させる。 ○ 「新訂版歯学生のための一般病理組織アトラス」 P.24-P.32 ○ 「口腔病理アトラス」 P.87、P.88 (D-4-2)①～④)	安彦 善裕 佐藤 惇 吉田 光希 森川 哲郎 大村 一将 西村 学子
4	◎ 〈炎症 ①〉 1) 非特異性炎 ①	● 炎症①では①急性炎の組織所見、②膿瘍と蜂窩織炎との違い、③劇症肝炎の組織像について理解し説明	安彦 善裕 佐藤 惇

回	テーマ	授業内容および学習課題	担当者
	(1) 急性炎 a) ラット足蹠カラゲニン注射、ハムスター口腔粘膜 b) 急性気管支肺炎と膿瘍 c) 蜂窩織炎 d) 劇症肝炎 e) 急性歯髄炎 f) 急性化膿性歯髄炎	できる。 ○「新訂版歯学生のための一般病理組織アトラス」P. 33-P.46 (D-4-4)①～④) ● 齶蝕に続く歯髄の炎症について、齶蝕病巣とともに歯髄の変化を観察する。また、病理組織学的分類について学ぶ。 ○「簡明口腔病理アトラス」P.40-P.43 ○「口腔病理アトラス」P.59-P.60 (F-3-3)-(2)①③)	吉田 光希 森川 哲郎 大村 一将 宇津宮 雅史
5	◎〈炎症 ②〉 1) 非特異性炎 ② (1) 慢性炎 a) 慢性胃炎 b) 慢性耳下腺炎 c) 単純性リンパ節炎 d) 慢性潰瘍性歯髄炎 e) 慢性増殖性歯髄炎	● 炎症②では慢性炎症について観察し、急性炎症との違いについて理解し説明できる。 ○「新訂版歯学生のための一般病理組織アトラス」P. 33-P.46 (D-4-4)①～④) ● 齶蝕に続く歯髄の炎症について、齶蝕病巣とともに歯髄の変化を観察する。また、病理組織学的分類について学ぶ。 ○「簡明口腔病理アトラス」P.40-P.43 ○「口腔病理アトラス」P.61-P.62 (F-3-3)-(2)①③)	安彦 善裕 佐藤 惇 吉田 光希 森川 哲郎 大村 一将 神野 由貴
6	◎〈炎症 ③〉 2) 非特異性炎 ③ a) 歯根肉芽腫 b) 歯根嚢胞	● 炎症③では、歯髄炎から移行する根尖性歯周炎について観察し、その分類や転帰について学ぶ。 ○「簡明口腔病理アトラス」P.46-P.49 ○「口腔病理アトラス」P.66-P.68、P.189-P.190 (F-3-3)-(2)①③)	安彦 善裕 佐藤 惇 吉田 光希 森川 哲郎 大村 一将 高橋 耕一
7	◎〈炎症 ④〉 3) 肉芽腫性炎(特異性炎) a) 結核性リンパ節炎 b) 結核症(副睪丸炎) c) サルコイドーシス	● 炎症③では、①慢性炎の組織所見、②特異性炎、特に、結核、サルコイドーシスの基本構造について学び、①では急性炎との違い、②では非特異性との違いについても理解させる。 ○「新訂版歯学生のための一般病理組織アトラス」P.33-P.46 (D-4-4)①～④)	安彦 善裕 佐藤 惇 吉田 光希 森川 哲郎 大村 一将 青木 一太
8	◎〈腫瘍 ①〉 1) 良性腫瘍 (1) 上皮性 a) 乳頭腫(口唇) b) 濾胞状腺腫(甲状腺) c) 腺腫(大腸) (2) 非上皮性 a) 血管腫、毛細血管型 b) 血管腫、海綿状型 c) 線維腫 d) 神経鞘腫 e) 神経線維腫 f) 子宮筋腫 g) 粘液腫(中心性) (3) 混合性 a) 線維腺腫 b) 骨軟骨腫	● 腫瘍①では、腫瘍とはいかなるものか、上皮性腫瘍と非上皮性腫瘍および混合性腫瘍について、腫瘍の実質と間質について組織学的にはどうなのか、腫瘍の基本事項について理解する。 また、左記の良性腫瘍の各々についてその組織学的特徴を捉える。 ○「新訂版歯学生のための一般病理組織アトラス」P. 47-P.56、P.93-P.94 ○「スタンダード病理学」P.240-P.241、P.264-P.270 (D-4-5)①～⑥)	安彦 善裕 佐藤 惇 吉田 光希 森川 哲郎 大村 一将
9	◎〈腫瘍 ②〉 1) 良性腫瘍 (1) 上皮性 a) 乳頭腫(口唇) b) 濾胞状腺腫(甲状腺) c) 腺腫(大腸) 2) 悪性腫瘍 (1) 上皮性 a) 扁平上皮癌(舌)	● この項では〈腫瘍①〉の良性腫瘍と比べ、特に上皮性悪性腫瘍の特徴について学ぶ。また、転移の概念、原発巣と転移巣の組織学的所見についても学ぶ。 ● 鍍銀染色を観察して、上皮性腫瘍と非上皮性腫瘍の構造の違いを学ぶ。 ● ケラチン免疫染色標本を観察し免疫染色の有用性を理解する。 ○「新訂版歯学生のための一般病理組織アトラス」P.64-P.81	安彦 善裕 佐藤 惇 吉田 光希 森川 哲郎 大村 一将

回	テーマ	授業内容および学習課題	担当者
	b) 腺癌（胃）	○「スタンダード病理学」P.243-P.244	
10	◎〈腫瘍 ③〉 2) 悪性腫瘍 (2) 非上皮性 a) 骨肉腫 b) 軟骨肉腫 c) 悪性黒色腫 (3) 特殊な悪性腫瘍 a) 肝硬変と肝癌 b) 非ホジキンリンパ腫 c) ホジキンリンパ腫 d) 慢性骨髄性白血病	● 腫瘍③では左記の非上皮性腫瘍の悪性腫瘍と特殊な悪性腫瘍の特徴について学ぶ。 ○「新訂版歯学生のための一般病理組織アトラス」P.57-P.63、P.77、P.82-P.92 (D-4-5)①～⑥)	安彦 善裕 佐藤 惇 吉田 光希 森川 哲郎 大村 一将
11	◎〈総括〉	● 実習全体の理解度を確認する。	安彦 善裕 佐藤 惇 吉田 光希 森川 哲郎 大村 一将

【評価方法】

◇ 試験（80％）、日常の学習意欲・レポート・実習帳完成度（20％）

なお、試験は病理学・口腔病理学講義と合同で実施し総合評価する

【備考】

教科書：「スタンダード病理学」下野 正基 編 学建書院
「口腔病理アトラス」第3版 高木 實 編 文光堂
「新口腔病理学」第2版 下野 正基・高田 隆 編 医歯薬出版
「疾病の成り立ちと回復の促進 [1] 病理学」医学書院

参考書：「口腔病理学Ⅰ」石川 梧朗・秋吉 正豊 共著 永末書店
「口腔病理学Ⅱ」石川 梧朗 監修 永末書店
「臨床口腔病理診断学」下野 正基・賀来 亨 監訳 医歯薬出版
「口腔病理カラーアトラス」石川 梧朗 編 医歯薬出版
「新訂版歯学生のための一般病理組織アトラス」賀来 亨・山本 浩嗣 編 永末書店
「簡明口腔病理アトラス」賀来 亨・田中 昭男 著 永末書店

【学習の準備】

☆ 事前に講義資料、教科書、アトラスを用いて予習して実習に臨む。（80分）

☆ 実習後は、実習書を完成させ復習も行い提出期限までに提出する。（80分）

【ディプロマ・ポリシー(学位授与方針)との関連】

DP1.人々のライフステージに応じた疾患の予防、診断および治療を実践するために基本的な医学、歯科医学、福祉の知識および歯科保健と歯科医療の技術を習得するために必要な知識を病理学の観点から修得する（専門的実践能力）。

DP3.疾患の予防、診断および治療の新たなニーズに対応できるよう生涯にわたって自己研鑽し、継続して自己の専門領域を発展させる能力を病理学の観点から身につける（自己研鑽力）。

【実務経験】

安彦善裕（歯科医師）、佐藤 惇（歯科医師）、吉田光希（歯科医師）、森川哲郎（歯科医師）
大村一将（医師）

【実務経験を活かした教育内容】

病理専門医および医師・歯科医師としての医療機関での実務経験を活かし、特に歯科治療において実際に経験することの多い疾患について効果的な教育が期待できる。

非常勤講師においても、全員が歯科医師でありまた日常的に歯科医院にて実務を行っている者が多く、歯科治療における口腔病理学的知識の必要性をより実感させることができる。